

# 追悼



## 仁科雄一郎先生を偲んで

黒田 規敬

Kuroda Noritaka

仁科先生が若い日に米国アイオワ州立大学に留学し、大学院博士課程でゲルマニウム (Ge) のマイクロ波ファラデー回転効果の研究に傾注されていた1950年代後半は、半導体の磁気-光吸収の研究が米国で大きく花開き始めた時期だった。1960年にPh.D.を取得すると、拠点の1つだったMITの強磁場研究所に志願して博士研究員として移られた。アイオワで培ったGeの波動光学応答についての考究力を駆使して強磁場下で起こる近赤外線ファラデー回転スペクトルの謎を解き明かし、世界で初めての知見を次々と明らかにされていった。

1963年に東北大学金属材料研究所の講師として帰朝し、助教授を経て1971年に教授に就かれた。研究対象を化合物半導体にも拡げて行かれる中で、これまで以上の強い磁場を繰り返し発生させることができるパルス電磁石を自身で設計製作し、この電磁石を用いて磁気光学効果の新しい研究手法を開拓することに意を注がれた。

また、いち早くレーザー光の役割に着目され、各種のレーザーを用いて照射した層状半導体等に生じる電子の凝集や光放射と光散乱の研究を展開された。同時に、大出力レーザーを導入して所内共用のレーザーラマン室を創設され、更には紫外光レーザーパルスによる固体物質表面からの原子クラスターの離脱現象にまで興味を深化させて行かれた。

これらの多彩な仕事により国内外の信望を受けて、いろいろな学協会の要職に加え、1975年に「Physics of Highly Excited States in Solids」と題した日本学術

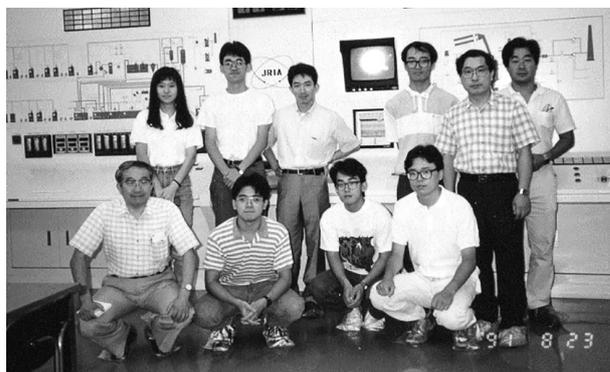


写真1 1991年仁科研夏の学校での滝沢研究所見学

(田中航氏提供) 前列一番左が仁科先生、後列右から二人目が筆者

振興会王子セミナーの事務局長、1980年に「Physics and Chemistry of Layered Materials」と題した第4回山田コンファレンス事務局長、1989年に「光科学と新物質探索」を謳った第27回茅コンファレンス組織責任者、そして1992年には第1回「ナノスケール科学国際ワークショップ」組織委員長等々の役割を担われて我が国と世界の光物性研究の発展に多大の貢献をされた。

八幡平での前記の茅コンファレンスではおよそ130名の参加者を日本アイソトープ協会滝沢研究所に案内し、自ら概要を講義された。手元にあるそのときの記念写真には久保亮五仁科記念財団理事長、鈴木進滝沢研究所初代所長、他大勢の懐かしい方々の顔が見られる。横山すみ女史(当時協会事務局長)の姿もあり、優しくしていただいた我々仁科先生の教え子には殊の外懐かしい。

研究室では夏休みの時期に仁科研夏の学校と称し、東北地方の公的施設に合宿して勉強会を行っていた。1973年頃、当時女川にあった東北大水産実験所に始まり、その後回を重ねて1991年は国立岩手山青年の家だった。先生は日本アイソトープ協会関係の業務を普段ほとんど研究室に持ち込まれなかったが、このときは珍しく、折しも仁科記念サイクロトロンセンターが開設されたばかりの滝沢研究所に我々を誘われ、皆で見学に伺った(写真1)。

先生は研究室の誰もがアイデアが浮かぶとなぜか話に行きたくなる、天性の包容力を持たれた方だった。先生の現役引退後も最近までOB、OG達は毎年秋に各地から集まって先生への近況報告会を持っていた。新型コロナ禍のため2019年が最後になった。晩年体が弱られてもなお楽しそうに聞いてくださったことが忘れられない。

(東北大仁科研究室OB、熊本大学元教授)